
プラタナス並木の道から

a s a m i

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

プラタナス並木の道から

【Nコード】

N1773A

【作者名】

asami

【あらすじ】

師走。高校生の矢萩まつりは年上の幼馴染、瀬川要せがわかなめが好き。気を引こうと、雪の日待ち伏せして車に同乗するのが楽しみ。「プラタナス並木の道を、いつか一緒に歩きたい」ささやかな想い。そんな折、瀬川要の祖母がまつりの不注意で入院し、責任を感じる。クラスメイトの萩原紀はぎわらかなめも気になる存在で…北国、旭川。雪の街でのほのかな恋。

1・雪の朝

朝から大粒の牡丹雪が降っていた。それは見る見るうちに降り積もり、道という道はただ真っ白く埋め尽くされていた。

「要ちゃん、ねえいいでしょ？ 学校まで送ってよ」

「またか？ けどなあこの雪だし、俺、一番下っ端だから遅刻したらまずいんだよな」

瀬川要はトレンチコートの袖をめくってちらちらと腕時計に目をやり、出勤時間を気にしている。

そんな彼を車庫の前で捕まえて、矢萩まつりは駄々をこねていた。

「いいじゃない、どうせ一緒の方向だもん。この雪じゃ、バスで行ったら遅れちゃう。要ちゃんの銀行前で降ろしてくれてもいいよ。そこから歩くから」

「わかったよ。仕方ないなあ」

眉間にしわを寄せ、眼鏡の奥の涼しげな目を細めて、ぶつぶつと文句を言いながらも瀬川要は車の助手席のドアを開けた。

やったあ！ 十二月初めての成功！

矢萩まつりは心の中で叫んだ。

瀬川要の方が最後には折れてくれる。昔からそうだった。ちょっと口が悪いが誰にでも優しい。自分だけが特別じゃないのが矢萩まつりには少し寂しかったのだが。

半年間も雪で閉ざされる冬は、寒くて憂鬱だったが、矢萩まつりにとって大雪の朝は特別だった。

要ちゃんとミニドライブができる。

この冬、三回目のミニドライブだった。

お向かいの洒落た洋風の家に住んでいる、まつりより六歳上で背の高いお兄さん。この辺りでは少しばかり大きい家で、ビルトインの車庫も二台分あり、車は三台あった。

瀬川要は面倒見が良く、小さいまつりともよく一緒に遊んでくれ

た。だが、瀬川要が高校に入学した頃からあまり構ってくれなくな
った。

部活動だの、同級生と遊びに行くだの、ほとんど家にもいないよ
うだった。大学は札幌に進学して下宿暮らしだったし、卒業後は地
元、旭川の銀行に就職したのだが、今は、「お早う」の挨拶をする
くらいだった。

危機的関係だった。

といつても、そう思っているのは矢萩まつりだけなのだが。

初めからまつりの一方通行の想い。ただのお向かいさんという関
係なのだ。

瀬川要が旭川に帰ってきて一年、高校二年生の矢萩まつりは二階
の窓からじつと彼が出勤するのを覗き見るのが日課になっていた。
そして、瀬川要が玄関ドアを開けた瞬間、まつりは慌てて家を飛び
出すのだった。

ただ、「お早う」の挨拶をするために。

だが雪の日は違った。普段より早く起きて入念にヘアスタイルを
チェックする。肩より長い髪は癖毛があるから手入れに時間がかか
る。でも丸顔を隠すには髪を切るわけにはいかない。寝癖が直らな
いなんて絶対許せなかった。微かに甘い香りのする保湿リップも忘
れない。本当はアイシャドウやアイライナーで二重を強調したいと
ころだった。が、いくら私服の高校だとはいえ、さすがに化粧はして
いけない。

美人顔ではない矢萩まつりは、子供っぽく見えないよう最大限の
努力をしていた。

寝坊をしようものなら、泣き出したい気分になった。朝、瀬川要に
会えないと、一日中憂鬱な気分になるのだ。

今朝の矢萩まつりは、ちょっと子供っぽいグレーのダツフルコー
ト意外は完璧だった。

これから、瀬川要の車でプラタナス並木の道を通れるのだ。

木が生い茂る、神楽岡公園に沿って伸びている道。冬枯れしたプ

ラタナスの並木道は、夏とは違った表情を見せる。灰色の世界はもの悲しい雰囲気もあるが、好きな人と一緒だと景色が一変する。

綿菓子のようにふんわりと枝に乗っている純白の雪。美しく雪化粧した街路樹のトンネルが続き、なんともロマンチックな気分になれるのだ。

いつか、腕を組んで二人で歩いてみたい。そして、その途中にある教会を訪ね、結婚式はいつ？　なんて、日取りを決めたりしてみたい。

とりとめのない空想の世界に浸っていた矢萩まつりは、車窓の景色を見て現実の世界へ引き戻された。

「えっ？　何で曲がるの？」

プラタナスの並木道の途中で、瀬川要はハンドルを右に切ったのだ。

「この雪じゃ、神楽橋は渋滞しているからね」

「えーっ、いいのに」

「何がいいんだ。遅刻するだろう？」

「きつと、どの橋を通っても渋滞してるんじゃない？」

「そんなことはない」

瀬川要が行った通り、手前にある大正橋方面はスムーズに通過できてしまった。

屋根にどっかりと雪が覆い被さっている家々が重苦しそうに立ち並んでいる。そんな住宅街を、車はするりと通り抜けていった。

折角のドライブコースなのに……。

矢萩まつりの盛り上がっていた気分が、一気にしぼんでしまった。

あと十五分もしないうちに、学校についてしまう。今日こそ要ちゃんに言わなきゃ。クリスマスに会ってくださって。今年は旭川にいるんだもの。……でも、要ちゃんはどう思うだろう。

焦れば焦るほど、矢萩まつりは口が重くなった。ずっと言いそびれていた。早く言わなければ誰かと予定を立ててしまうかもしれない。

「なあ、その髪、うっとおしくないか？　まとめるか切るかしたほうがすすきりするんじゃないか？」

正面を向いたまま言った瀬川要の思いもよらない言葉は、矢萩まつりを突き刺した。

「に、似合わない？」

「うーん、勉強するのに邪魔くさそうだ。髪や服装ばかり気にしてたら、落ちこぼれるぞ」

「失礼ね。それでも成績は学年上位なんですからね！」

そんな髪、切ってしまいなさい。

瀬川要の言葉は、母を思い出させた。口煩い母。常に監視されているような気さえしてしまう。

要ちゃんとは六歳しか違わないのに、どうしてお母さんと同じことを言うの？　大人になったら、皆同じ考え方をするの？

こんな時、まだ高校生である自分と社会人の瀬川要との年の差を痛切に思い知らされてしまうのだ。

「でも不思議だよなあ。まつりが東高に行っているっていうのがさ」
矢萩まつりが無言で抗議していると、瀬川要はポツリと言った。

「なによそれ。どういう意味？」

「そんな風には見えない」

ちらりとまつりの方を見て、意地悪そうにやりとしながら瀬川要が言った。

シヨック。私って頭悪そうに見える？　要ちゃんは一体私のことをごんな風に見ているの。

東高は市内でも偏差値レベルの高い高校だった。だが、矢萩まつりは必死に受験勉強をして見事合格したのだ。

同じ学校へ一緒に通えることはないが、せめて瀬川要の母校に入学したかった。少しでも接点がほしい。それに、いつだったか、「知的な娘が好みだ」と瀬川要が言っていたのを覚えている。瀬川要の好みに近づこうとまつりなりに頑張っていたのだ。

軽い娘に見られていたなんて。

「さあ、着いたぞ」

落ち込んだ気持のまま、瀬川要の横顔を見ている間に高校の正門前に到着してしまった。

まつりが無言のまま車を降りると、「じゃあな」と言っ、瀬川要は車を発進させた。

だめだ。クリスマスのこと、言い出せなかった。送ってくれたお礼まで言い損ねた。

まつりは益々落ち込み、その場に棒立ちになった。

「おう、矢萩。門の前で突っ立って何やってんだよ」

クラスメイトの萩原紀はぎわらかなめが走り寄ってきた。

「いいじゃない、構わないですよ」

「遅刻になるぞ」

リュックを肩にかけ、まつりと同系色のダッフルコートを着ている。並んでいるとペアルックのようだ。

「いいの、先に行つてよ！」

「なんだよ、可愛くない女」

萩原紀は言い捨てて走っていった。

校門付近には学生の姿はなく、走って教室まで行かないと遅刻してしまう時間だったのだが、まつりはどうしても萩原紀と一緒に教室へ入りたくなかった。

矢萩と萩原、つなげて『矢萩原』やはぎわらとあだ名され、ことあるごとにクラスメイトに冷やかされていた。それに、瀬川要と同じ『かなめ』という名前。漢字こそ違うが、大切な要ちゃんと同じ名前だ。『かなめ』と誰かが呼ぶたびにどきりとして反応してしまう。学校に瀬川要がいるはずもないのに。性格も物静かな要ちゃんとは正反対で、萩原紀はスキー部に所属し、体育会系だ。萩原紀が嫌な性格だとか、生理的に受け付けられない外見だとか、そういうことではないのだが、名前が同じというだけでいちいち気に障る。その紛らわしさにまつりは苛々させられた。

理不尽な感情なのだが、矢萩まつりにとって、とにかく、萩原紀

プラタナス並木の道から

の存在は許せないのだ。

瀬川要との朝の貴重なひと時を楽しく過ごせなかった矢萩まつりは、一日中憂鬱だった。

「お向かいのお兄ちゃん、婚約が決まったんだって」

その日、夕食の食卓で母が近所の噂話を始めた。

まつりはおかげでご飯を喉に詰らせてしまった。

「お、お向かいのって、要お兄ちゃんのこと？」

「ええ、そうよ」

「だって、まだ二十三歳でしょ？ それに就職して一年しか経っていないのに」

嘘だ、嘘だ。きっと何かの間違い。朝、要ちゃんはそんなこととは一言も言っていないかった。お母さんはまたどこかで聞き間違えているに決まっている。前にも裏の家のおじいさんが亡くなったって慌ててお悔やみに行ったら、老犬が亡くなったのと聞き間違えていて大恥かいたことがあったもの。

矢萩まつりは、母親の言葉を必死で否定した。

「だって、瀬川さんちの隣の奥さんが言っていたのよ。早くにいい人が見つかって良かったじゃないの。近頃は独身の方が気楽で自由だからっていつまでも結婚しない人が多いって言うでしょ？ まつりもそんなことにならないでね。お母さんはまつりが矢萩の名を継いでくれるのが夢なんだから。そして、まつりの可愛い赤ちゃんを抱っこするの」

「よしてよ。夢も希望もないことを言わないで」

「あら、赤ちゃんほしくないの？」

母の話は飛躍しすぎる。その前に就職があるでしょう？ 私にだって将来の夢があるのよ。

本当はそう反論したかったのだが、実際、まつり自身、どんな仕事に就きたいのかまったく見当がつかなかった。

もううんざり。ことあるごとに、『矢萩』の名を継げというんだもの。

まつりは親戚に一度も会ったことはなかった。それに、一般の家庭となんら変わった所もなく、別段、由緒ある血筋とは思えなかった。『矢萩』は母方の姓だ。父は婿入りしたことになる。

夫婦別姓も珍しくない昨今ではあるが、好んで妻の姓を名乗る夫はそういないだろう。そうまでして守る価値のある名なのか。どういう理由があるにしても、名を継げと子供にまで押し付けられては迷惑だ。だが、まつりは母の悲しい顔を見たくなくて、いつものことだからと自分を納得させ、反論せずに黙ってご飯を口にした。

出張で留守がちな父。食事は大抵、母と二人で摂ることになる。母は食事中、静かなことが罪悪だとも考えているのか始終話している。

小学生の頃はそれが嬉しかった。世間話が好きで賑やかな母。でもさすがに高校生となった今、この食卓は煩わしいだけになっていった。

これも反抗期なのかな。

まつりは自分自身を冷静にそう分析して苦笑した。

「まつり、何がおかしいの？」

「別に、ちよつとね」

「おかしな子」

肩をすくめて母が言った。

矢萩まつりは母が言った要ちゃんの婚約話を、無意識のうちに頭の奥に葬っていた。

日曜日。朝十時を過ぎても冷え込みは緩まなかった。

矢萩まつりはいつものように自室の窓から、そつと様子を伺っていた。

瀬川要が出てきてワゴン車のエンジンをかけ、車の雪を下ろし始めた。十五分ほどして、両親と一緒に大学生になる妹が、よそ行きのコートを着て外に出てきた。おばあちゃんまで訪問着を着ている。

お向かいの瀬川家は、家族揃って出掛けるようだった。

こんな時間からどこへ行くのだろう。要ちゃんまで正装している。

まつりはいてもたってもいられなくなり、ジャンパーをはおり、手袋をはめて外へ出た。

「お早うございます」

まつりは家の前のあまり積もっていない、数センチの雪を除雪しながら、瀬川家に挨拶をした。

「お早う、まつりちゃん」

瀬川家からそれぞれ挨拶が返ってきたが、要ちゃんはこちらを一瞥しただけで、黙々と雪下ろしをしている。

「まつりちゃん。えらいねえ、雪はねのお手伝いかい」

瀬川要の祖母がまつりに声をかけた。まつりが小さい頃、よく遊んでくれたおばあちゃんは病院へ車で通う以外は外に出ることはなく、久しぶりに顔を合わせたのだった。

足が弱り、去年は心臓を悪くして数ヶ月入院していたと聞いていたが、暫く見ないうちにおばあちゃんの背は曲がり、杖を突くようになっていた。もう八十歳後半になるだろうか。まつりが記憶していた元気なおばあちゃんとは別人のように顔が痩せ、よろよろと杖を突きながらこちらへ近づいてくる。

まつりはおばあちゃんのことなど、すっかり気にも留めなくなっていた。瀬川要が自分のことを全く気にも留めなくなったのと同じように、自分もまた、おばあちゃんをすっかり忘れ去っていたのだ。小学二年生の時、自転車に乗ったまま坂道で転倒し、脛に大きな切り傷を負ったことがあった。血はなかなか止まらず、どくどくと流れて靴も血まみれになった。母は丁度買い物に出掛けていて、家には誰もいなかったのだ。

もしかしたら、このまま死んでしまうのではないかとさえ思った。不安に駆られ、家の前で号泣していると、瀬川のおばあちゃんが駆けつけてきてタオルで足を縛り、近所の病院までおんぶして連れて行ってくれた。

「大丈夫、大丈夫。直ぐ痛くなくなるから。まつりちゃんは強いねえ」と、自分を背負って歩きながら、病院につくまで何度も優しく励ましてくれたのを、今でもはつきりと覚えている。その時、傷は五針縫う深さだった。帰宅した母はおばあちゃんから足を縫合したと電話口で連絡を受けて病院に駆けつけたのだが、動揺して涙ぐんでいた。母はおばあちゃんに何度も頭を下げてお礼を言っていた。

九年ほど前のことだから、今思えば、おばあちゃんはその頃、もう七十歳後半だったはずだ。心臓の弱いおばあちゃんが、息を切らしながら自分を背負って病院まで運んでくれたのだ。

あんなに優しくしてくれたおばあちゃんなのに。

まつりはおばあちゃんのお見舞いに行こうと母に誘われた時、友達と遊びに行くからと断ったことを思い出した。今頃になって、薄情な自分が恥ずかしくなった。

そんなおばあちゃんが以前のように優しくまつりに声をかけてくれている。

まつりは顔があわせづらく、愛想笑いをしながら軽く会釈した。

「まあまあ、随分大きくなって。まつりちゃん、綺麗になったねえ」顔をくしゃくしゃにして満面の笑みを浮かべ、おばあちゃんは懐かしそうに言った。

「まつりちゃんが、要のお嫁さんになってくれたらいいのにねえ」
「えっ」

『お嫁さん』と言う言葉に反応して、まつりは思わず顔を赤らめたのだが、その後が続いたおばあちゃんの言葉に耳を疑った。

「そうしたら、要もずっとここにいられるのに……」
要ちゃんがどこかに行ってしまうの？

「ばあちゃん、もう行くぞ」

まつりが訊き返そうとした時、瀬川要が声をかけておばあちゃんを連れに来た。

「なんだ、まつり。雪はね手伝って点数稼ぎか。親に何をおねだり

する気だ？」

瀬川要にはおばあちゃんが言った言葉は聞こえなかったようだった。にやりと笑い、まつりに向かって憎まれ口を叩いた。

瀬川要はいつものトレンチコートを着ていたが、髪をすっきりと整えていつもより大人びて見えた。そんな要のことが眩しくて、まつりはまともに顔を合わせられなかった。

「失礼ね！ そんなことしませんよっ！」

これからどこへ出掛けるのか。要ちゃんは違うところになくなってしまふのか。と、喉元まででかかったが、口を尖らせてそう言い返すのがまつりには精一杯だった。

おばあちゃんはまつりに手を振ると、瀬川要に手を引かれながら車の方へ戻っていった。杖をつき、雪の上をヨチヨチと歩く後姿が、とても弱々しく小さく感じられた。

私を背負ってくれた背中はあるなに小さかっただろうか。

おばあちゃんの変わり果てた姿に、矢萩まつりはうまく説明できない、胸の奥が締め付けられるような感情が沸き起こってくるのを感じた。

要もずっとここにいられるのに。

そして、おばあちゃんの言葉に、まつりは新たな不安を抱いていた。

しんとした雪に包まれた住宅街。雪も降らない、冷え込んだ昼前の出来事だった。

3・母

「お見合いだつて」

昼食時、母は嬉々として言った。午前中の瀬川家のお出かけを見ていたのは、矢萩まつりだけではなかった。

母もまた気になっていたのだ。早速、お隣の奥さんに電話して情報収集に励んでいた。

それによると、お相手は勤め先である銀行の札幌本店にいるお偉いさんのお嬢さんだそうだ。『お見合い』がいつの間にか『婚約』になっていたのだ。やはり、母の情報は当てにならない。

「凄いわよねえ。だって、本店のお嬢さんでしょう？ やっぱリイイ男は得よね」

間違っていたことにはお構いなしに、母はミートソーススパゲツテイをほおばりながら話した。

「馬鹿みたい」

要ちゃんのそんな噂を楽しそうに言うことないじゃない。

まつりはいふくれてしまった。

「まつりもねえ、もうちよつと可愛げがあつたらねえ」

「なによ、それ」

「しょうがないか。ママの子だものね」

母はまつりを見て、嫌なため息をついた。

確かに二人は似ていた。丸顔に団栗目で、女らしい服装をしても、大人っぽく見えない。スリムといえば聞こえはいいが、凹凸がなく子供体型だった。母はいつまでたってもジーパンに टीーシャツが 一番しっくりしていた。髪は長く伸ばし、一緒に買い物に行くと姉妹に見られることもあるほどだ。

若作りしているわけではないのだが、小柄でいつまでも幼く見える。それに加えて一向に大人の落ち着きをもてない母。

まつりは自分の外見にコンプレックスをもっていたのだが、それ

を全て母のせいにしていた。

母の娘である自分は、この先、メリハリのある体型になるという望みは薄いと、まつりは勝手に思い込んでいた。

一方、父は体を動かすことが好きなのだろう。仕事のためもあり、常に体を鍛えることを怠らない。程よく引き締まった体型に、あくまでも爽やかな笑顔。久しぶりに会うと一緒に歩いて自慢したくなるような父だ。若い頃はさぞかし女の子にもてていたのではないだろうか。父は母より十一歳も年上だったが、その年の差を感じさせない快活さがあつた。

子供っぽい母がどうやって父を射止めたのだろうか。どうも想像できない。一度、まつりは母に聞いてみたことがあつたがうまくはぐらかされた。

どうして父に似なかつたのだろう。こんな私でも恋人ができるのかしら？

「いやになっちゃう」

まつりは小さくため息をついてフォークを皿に置いた。

「まつりちゃん、好きな人がいるんでしょう？ なんでも相手にはつきり言わないと後で後悔することになるわよ」

どきりとした。

母は全てお見通しだとも言うように、真面目な顔をしてまつりを諭した。

「ごちそうさまっ」

まつりは席を立ち、逃げるように自分の部屋へ上がった。

4・彼女

事態は最悪の方へ向かっていた。

学校の帰り、矢萩まつりは瀬川要が若い女性と一緒に街を歩いていたのを目撃してしまったのだ。髪の毛長いその女性は、瀬川要の傍で楽しそうに微笑んでいる。落ち着いた感じの大人の女性。

「要、ちゃん……」

雪が、顔に降りかかっても何も感じなかった。雪の冷たさよりも矢萩まつりの心の方が冷たく凍りついてしまったのだ。

バス停横の横断歩道で信号待ちをしている瀬川要は女性と楽しそうに話し、まつりに気がついていないようだった。

「矢萩、今帰りか？」

タイミング悪く、クラスメイトの萩原紀はぎわらかなめがまつりに声をかけてきた。自分はきつと泣きそうな顔をしているに違いない。そんな顔を見られたくない。

まつりは、「かまわないですよ」と冷たく言葉を返してそっぽを向いた。

「おまえ、泣いてるの？」

萩原紀はしつこくまつりの顔を覗き込もうとしている。

「うるさいわね。ほっといてよ」

どうして萩原紀にお前呼ばわりされなきゃいけないのよ。

まつりは泣くに泣けず、まとわりつく萩原紀に苛立って八つ当たりをした。

瀬川要と若い女性はまつりに気がつくことなく通り過ぎていき、まつりはその姿を目で追っていた。

まつりははっとした。

萩原紀がまつりの視線の先にいるカップルに気がついたのだ。

「ちよっと付き合えよ」

「えっ、ちよっと待って」

萩原紀は何を思ったのかまつりの腕をぐいと引つ張り、買い物公園をどどん歩いていった。その先を瀬川要と若い女性が歩いている。

萩原君は私が失恋したって思ったのかもしれない。冷やかされると思ったのに。萩原君は私を何処に連れて行くつもりなの？ いやだ。このままじゃ、要ちゃんと鉢合せしてしまう。

「お願いだから、そっとしておいて！」

まつりはその場に立ち止まり、やっとの思いで萩原紀の手を振り払った。

萩原紀は何か言いたそうだったが、「わかった」と頷き、「……じゃあ、なにか食うか？」と笑顔で言った。

まつりが黙っていると、萩原紀はデパートの地下へまつりを引っぱって行き、ソフトクリームを奢ってくれた。

彼なりに気を使ってくれたようだった。

「……ありがとう」

「気持ち悪いな。俺ピンボーだから、これ以上は奢れないぞ」

「でも、どうしてソフトクリームなの？」

「女って甘い物食ったら、元気になるんだろ？」

「何よそれ。ひどい偏見」

萩原紀の気持ちが嬉しかったのだが、まつりは照れ隠しに口を尖らせた。萩原紀のおかげで、まつりは人前で泣かずに済んだのだ。た。

5・おばあちゃん

数日後、矢萩まつりは瀬川のおばあちゃんがまた入院したのだと母から聞いた。今度は必ずお見舞いに行こう。ついでに、要ちゃんのお見合いのこともそれとなく聞いてみようと思った。

瀬川要が若い女性と歩いているのを見かけてからまつりは顔を合わせづらく、瀬川要を避けていたのだ。

顔を見ただけで、泣いてしまいそうだったから。

「まつりちゃん、お見舞いに行ってくれるの？　ありがとう。おばあちゃん、きつと喜ぶわ」

瀬川のおばさんが入院先を聞きに来たまつりに笑顔で応えた。それから顔を少し曇らせて、「でも……もしまつりちゃんのことからなくなったら、ご免なさいね」と、つけたした。

「どういうことですか？」

「おばあちゃん、ボケちゃったの……」

まつりは何と云っていいのかわからなかった。目を見開いたまま、顔がこわばってしまった。

曖昧な笑みをうかべ、「そうですね」と言うのが精一杯だった。

ボケ老人。テレビドラマで見たことがあった。道に迷って家に帰れなくなったり、食事したのを忘れてたり。何もわからなくなってしまう、色々なトラブルをおこしてしまうのだ。まつりにはそんな悪いイメージしかなかった。まだ入院して一週間程度だときいたが、あんなにしつかりしていたおばあちゃんがそんなに急にボケてしまうものなのか。

瀬川要のお見合いのことを訊くどころではない。お見舞いに行ってもどう接したらいいのか。行くといった手前、今更行かないわけにはいかなかった。

決心を決めた頃には外は薄暗くなっていた。夕方、まつりは一人で病院を訪ねた。瀬川のおばあちゃんは三人部屋のドア側のベッド

に座り、ぼんやりと何も無い壁を見つめていた。

まつりが声をかけるのに戸惑っている、おばあちゃんは「こちらに気がついて、」

「あらあ、来てくれたの」

と、うつろだった表情が一変し、顔をほころばせた。

おばあちゃんの優しい笑顔を見て、まつりはようやく「こんにちは」ときこちない挨拶をした。

なんだ、ちゃんとわかっているじゃない。

自分が来たことを喜んでくれたおばあちゃんの姿に、まつりはほっとした。

病衣を着て、髪はぼさぼさだったが、今までとなんら変わりない、笑顔のおばあちゃんだった。だが、次に続いたおばあちゃんの言葉にまつりは耳を疑った。

「まだ迎えが来なくてねえ。遅いねえ」

「おばあちゃん、退院するの？」

おばあちゃんはドアの方を覗き込み、顔を寂しそうに曇らせている。入院したばかりのはずなのに。

「咲子、ちよつと見てきてくれないかい」

「え？」

咲子って誰？ まつりはきょとんとした。

おばあちゃんの目が異様に爛々としている。よく見ると、ベッドの足元には薄いマットが敷いてあり、どうやらそれはベッドを降りた時、センサーが感知して知らせるものようだった。

病室に顔を出した看護師に、まつりは声をかけた。

「あの、瀬川のおばあちゃん、今日退院なんですか？」

「瀬川さん？ まだ退院は決まっていけないけれど。お孫さんかしら？」

「いいえ、違います。私、向かいの家に住んでいて……」

「あら、そうなの。瀬川さん、可愛いお友達が来てくれてよかったですね」

看護師はおばあちゃんの顔を覗き込み、にこやかに話し掛けた。

「看護婦さん、まだ迎えが来なくてねえ。家に電話してくれないかい」

「そう、じゃあ電話しておきますね」

「心配だからそこまで見に行つてこようと思つて」

「もうそろそろ瀬川さんのご家族が来るはずなんだけれど。今日は遅いわね」

看護師はぼつりと呟いた。

夕方になるといつも家に帰りたがり、大抵この時間にお嫁さんに来てもらい、気の済むまで廊下をぐるぐると歩いてもらっているのだと、看護師は少し困つたような笑みを浮かべ、まつりに小声で教えてくれた。

「瀬川さん、お嫁さんが来るまで私と一緒に歩きましょうね」

「私、代わりに行つてもいいですか？」

「大丈夫？ 転ばないように気をつけてあげてね」

そう言つて看護師は病室を後にした。軽い気持ちで申し出てしまったのだが、まつりはすぐに後悔した。大変だったのだ。おばあちゃんは一階に下りたがり、誘導した方には進んでくれない。杖を持つているのだが、宙に浮き、上手く使えずにふらふらしながら歩いていた。

「まだ着かないのかい？」

まつりは何も答えられず、黙つて歩いていた。

どうしよう、何か話さなきゃ。

何と声をかけたら良いのか、まつりは頭の中が真っ白になった。

廊下の角に、瀬川のおばさんの姿が見えた。途端にまつりは肩の力が抜けた。

「まつりちゃん、ありがとう。おばあちゃん、もう夕食の時間だから部屋に戻ろうね」

「家に帰らないと……」

「おばあちゃん、無理を言わないで」

「咲子が待っている。帰らないと」

「なに言ってるの！ 咲子さんは小さい時に死んじゃったじゃないの！」

瀬川のおばさんが急にきつい声でおばあちゃんを怒鳴った。おばあちゃんは目を瞬かせ、びくりと体を強張らせた。

「おばあちゃん、お願いだから部屋に戻る？」

瀬川のおばさんは慌てておばあちゃんに優しく声をかけた。

「まつりちゃん、驚かせてごめんなさいね。つい怒鳴っちゃって。

おばさん、だめね。まつりちゃん、今日は本当に有難う。また来てね」

家に訪ねたときには気がつかなかったのだが、弱々しく微笑んだ瀬川のおばさんの目は充血し、疲れているようだった。

おばあちゃんは手を引かれながら黙って病室へ戻っていった。

いつも優しい瀬川のおばさん。上品な感じでスタイルも良くて、あんな人がお母さんだったらと憧れていた。そのおばさんがやつれて見えた。あんなに取り乱したおばさんを見るのは初めてだった。まつりは見てはいけないものを目にしてしまった気がした。

おばさんはきつと、こんな姿を見られなくなかったのではな
いか。おばあちゃんだって……私のがわからなかったおばあ
ちゃん。そんなに簡単に忘れてしまうものなの？ ……来なければよ
かった。

まつりは沈んだ気持ちで、真つ暗になった雪道をバス停までとぼ
とぼと歩いた。

6・焦り

あれから、まつりは一度もお見舞いに行かなかつた。おばあちゃんに会うのが怖かつたのだ。

一週間が過ぎる頃、瀬川家の庭先におばあちゃんの姿があつた。だが、その姿は少し奇妙だつた。雪の中、オーバーも着ずに大きな風呂敷包みを背負っている。

どうしたのかと窓から見ていると、瀬川のおばさんが慌てて出てきておばあちゃんを家の中へ連れ戻した。

「今朝退院したんですって。病院では心臓のほうは落ち着いたって言われたつて。それに、帰りたがつて仕方がないんですつて。でも、ボケのほうに酷いらしくつて大変みたいね」

母が掃除機の手を休めてまつりの方を向き、そう言った。

「ふうん」

まつりは気のない返事をした。

どうせ、私が心配してもどうすることもできないもの。

まつりは苛々していた。クリスマスは刻々と迫っているのに、瀬川要とはあれ以来会っていない。まだ会う勇気がなかつた。

あと、三日しかない。もう無理かも。

小遣いを溜めて買った黒い皮手袋は、部屋に大事に置いてある。まつりは諦めかけていた。

「ごめんね、彼氏と約束しちゃつて。まつりはクリスマスどうするの？」

「家でケーキでも食べようつかな？」

友達に、まつりはおどけて見せた。友達には彼氏と過ごす。それで焦っているというわけではないが、瀬川要のことをすつきりしないままにしておきたくない。

振られたとしても後悔しないように告白しよう。ようやく気持がそ

こまでたどり着いた所だった。

「矢萩、クリスマスは一人だって？」

放課後、萩原紀がにやにやしなから廊下で声をかけてきた。

「大きなお世話！ 萩原君には関係ないでしょ！」

「俺、付き合っただけでもないよ」

「えっ？」

「まだ、この前の奴のこと好きなのか？」

「萩原君には関係ない」

まつりはそう言いかけたが、萩原紀の真面目な顔に言葉を詰まらせた。

「あのさ、本当に……俺、あいているから。じゃ！」

萩原紀はそう言って廊下を走り去った。

「萩原君？」

なに？ 今の。私のこと心配してくれたの？

まつりはあっけにとられ、そして、くすりと笑ってしまった。まつりの心がちょっとだけ温かくなった。気持ちが明るくなると、降ってくる雪までもが柔らかな暖かいものに感じられた。

悩んでいてもどうにもならない。振られるかもしれないけれど、思い切っただけちゃんに告白しよう。まつりはそう決心した。

7・迷い

「要ちゃん、いますか？」

「あら、まつりちゃん。ごめんね。要は早くに出掛けて、今夜はそのまま忘年会だって言っていたから遅いと思うの。明日は祝日だし。何か用だった？」

瀬川のおばさんは、病院で見た時より元気そうに見えた。

「いえ、また明日来ます」

要ちゃんが出掛けたの、気がつかなかった。車があつたからいると思つたのに……。

「咲子」

おばあちゃんがうつろな表情で玄関ホールへ出てきた。

「おばあちゃん、出掛けなきゃならないのよ。一時間位で戻ってくるからうつろしないでくださいね。ほんとにもう、大丈夫かしら」
瀬川のおばさんは、喪服を着ていた。これからお通夜に行かなければならないのだという。

「あのう、私、お留守番してよろしいでしょうか？」

「えっ、でも……」

「おばあちゃんのこと危なくないように見ていたらいいですよ。大丈夫です」

「そう、じゃあ頼もうかしら。有難う。助かるわ」

まつりは一旦家へ戻り、買い物に出掛けている母宛にメモを残してきた。

「いつてらっしゃい」

まつりは瀬川のおばさんを笑顔で送り出した。

ちよつとどきどきしていた。それは、おばあちゃんを看ていられるかという不安からではなかった。少しでも要ちゃんに近づきたい。傍にいたい。そんな想いから何年振りかに足を踏み入れた瀬川家。以前と変わらない落ち着いた雰囲気の間とした居間。ここで要ち

「やんは生活しているのだ。そう思うと、まつりはどきどきした。おばあちゃんは居間のベランダの前を、外に行きたそうにうろろしている。」

「おばあちゃん、足が疲れちゃうよ。こっちに座ろう?」

「でもねえ、咲子は母さんが帰るのをじっと待っているんだよ。川の側の家だから、寒くてね。薪を沢山くべるように言っているけれど、心配だねえ」

「咲子って、誰なの?」

「娘だよ。あんた、咲子のこと知らないのかい?」

「おばあちゃんは不信そうな眼差しをこちらに向けた。」

「よく知らなくて。そう、娘さんなんだ」

「おばあちゃんの娘ということは、もうお母さんくらいの年?」
「でもこの前、瀬川のおばさんが咲子は小さい頃に死んじゃったといっていたけれど。」

「あの子はねえ、器量良しで自慢の娘なんだよ」

「おばあちゃんの優しい笑顔。でもどことなく寂しそうだ。」

「おばあちゃんは軽いため息をついてから、ようやくソファに落ち着き、まつりも隣に腰掛けた。」

「あれ? まつりちゃん?」

「瀬川要が居間に顔を出した。」

「お邪魔しています!」

「まつりは緊張して、思わずソファから立ち上がった。」

「ちょっと派手なネクタイを締めた瀬川要は、もうほろ酔いのようだ。」

「母さんは?」

「えーと、お通夜に行くつて。それで、お留守番」

「なんだ、金を借りようと思ったのに。電話すりゃ良かった」

「これから忘年会?」

「ああ」

「要ちゃん、なんだか顔が赤い」

「少し飲んだからな」

「だいぶ飲んでいるみたいに見えるけれど？」

「世話焼き女房みたいなのを言うな」

「要ちゃんの奥さんになつたら大変そう」

「どうして？」

「お酒代がかさみそうだから」

瀬川要は、にやっと笑った。

信じられないくらい、ぼんぼんと言葉が口から飛び出した。今まで通り冗談も言えるのだから、大丈夫。まつりはそう自分に言い聞かせた。

「要ちゃん、お見合いしたんだよね？ 綺麗な人だよ。この前、街で見かけたの。その人と結婚するの？」

まつりは思い切って訊いてみた。勤めて笑顔で話したつもりだったが、顔が強張っているのが自分でもよくわかった。

瀬川要はそれに答えず、口の端で笑った。

「ちょっと俺の部屋へ来ないか」

「でも、おばあちゃんが……」

「玄関の鍵をかけておいたから大丈夫」

瀬川要はまつりの肩に手を掛け、並んで二階へ上がった。

さりげない要の行動は、まつりの心臓を早鐘にした。

瀬川要の部屋は煙草の匂いがした。本棚にベッド。硝子の丸テーブルが一つ。ベッドサイドにCDラジカセと、数本の吸殻が入った灰皿。簡素で整然と片付けられている室内。

「俺、さつき振られたんだ」

ベッドに体を投げ出すようにして座った瀬川要の口から、意外な言葉が飛び出した。

要は背広のポケットから煙草を取り出して、ライターで乱暴に火をつけ、ふうと煙を口から吐き出した。まつりにはその時間がとても長く感じた。

振られたって、お見合いの相手に？ 要ちゃんが？

苛々している要に、まつりはなんと行って良いのかわからず、その場に棒立ちになっていた。

「で、自棄酒。笑えるだろう？ くそっ、あの女、とんだ食わせ者だった」

くわえ煙草の要の口から、信じられないような言葉が飛び出した。眼鏡の奥の、ぎらぎらした目。こんな瀬川要は見たことがなかった。「俺のことが、好きなんだろう？」

唐突に腕を引っ張られ、まつりは傍へ引き寄せられた。煙草と酒の匂いが鼻につく。

いつもの優しい要ちゃんとは全く違う、別人のような要ちゃん。

瀬川要は、紳士でも、王子様でもないのだ。生身の大人の男なのだ。まつりは勝手に想像を膨らませ、自分の都合のいい瀬川要を作り上げていたのかもしれない。そう気がつくと、瀬川要のことが急に怖くなった。

「クリスマス・イブ、一緒に過ごそうか？」

要の笑顔も、今のまつりには空々しいものに見えてしまった。

「要ちゃん、手、離して」

「まつり、どうした？」

呼び捨ての名前に、違和感を覚えた。まつりは後ずさった。

「ごめんなさい！」

まつりは部屋から、瀬川要から逃げ出した。

階段を駆け下りた所で、足の力が抜け、階段下にへなへたと座り込んでしまった。

心臓が飛び出しそうだった。瀬川要はまつりが望んでいた通り、クリスマスを過ごそうと誘ってくれた。なのに、逃げ出してしまっている。まつりは自分が分からなくなった。

「俺の早合点だったかな。ごめんな。脅かして。じゃ、俺、出掛けから」

要はまつりの頭を軽くぼんぼんと撫でて、玄関を出て行った。

違う、違うの。要ちゃんが好き。要ちゃんから誘われるなん

て思っていなかったから、驚いちゃったの。

まつりはそう言いたかったが、声にならなかった。床に座り込んだまま、ただ呆然と、要が玄関から出て行く背中を見送ったのだった。

「私、何をやっているんだろう。折角のチャンスだったのに」

まつりは予想外の出来事に放心状態になり、なかなか立ち上げられなかった。

部屋は嫌にしんと静まりかえっていた。

ああ、外は雪なんだ。

まだカーテンをしていなかったベランダの窓。暗闇の中、白く冷たい生き物が風に舞い、次々に地上へと落ちてくる。雪は音を吸い込み、静寂が支配する。

でも、静か過ぎる。

「そつえば、おばあちゃんは？」

まつりは立ち上がった。不安がよぎり、ソファに駆け寄った。おばあちゃんはいない。トイレも覗いた。いない。和室にも、キッチンにも。

「おばあちゃん！」

まつりは叫びながら家中探し回った。不安が増していく。考えたくなかったが、最後に玄関の靴を確認した。

おばあちゃんの靴はなかった。

「おばあちゃん！」

まつりは玄関を飛び出した。

外は雪が強く降り、視界が悪く、おばあちゃんの姿どころか人影はまったくなかった。

「おばあちゃん！」

雪が渦巻く中、まつりの声が空しく響いた。

どうしよう。どうしたらいいの。

頭の中が真っ白になった。こうしている間にも、おばあちゃんは雪が降りしきる中を彷徨っているのだ。

要ちゃんのこと気に気を取られて、おばあちゃんを一人にした私のせいだ。おばあちゃんから目を離さなければこんなことにはならなかった。おばあちゃんに何かあったら……どうしよう！
夜七時。瀬川のおばさんが出かけてから二時間は経っていた。

誰か、助けて！

冷たくなった涙が頬を伝った。まつりは町内を闇雲に探し回った。だが、おばあちゃんの姿はどこにも見つからない。息が切れて、とぼとぼと歩いた。

だめだ。一人では無理だ。落ち着け。まつりは自分に言い聞かせた。早く、早く見つけなければ。もしかしたら、おばあちゃんは家に戻っているかもしれない。

僅かな望みに、まつりは瀬川家まで走った。

いない。

瀬川家の玄関前に戻ったまつりは、失望し、再び涙が滲んだ。

「おばあちゃん……」

泣いていても、おばあちゃんは見つからない。まつりは俯いて涙を堪えた。

「まつりちゃん？ 何かあったの？」

顔を上げたまつりの前に、通夜から帰ってきた瀬川のおばさんが驚いた表情で駆け寄った。

「おばさん、ごめんなさい！ おばあちゃん、いなくなっちゃったの。ちよつと目を離れた隙に。私が、私が目を離さなければ……私のせいで。ごめんなさい！」

おばさんの顔を見た途端、まつりは後悔と罪悪感で胸が押しつぶされそうになり、涙が溢れ、膝をがくがくと震わせて、顔を色をなくした。

「まつりちゃんのせいじゃないわ。コートも着ないで。寒かったでしょう」

夕闇に、雪が降り続いていた。いつの間にかまつりの頭や肩に雪が降り積もっていて、瀬川のおばさんは、その雪を優しくはらって

くれた。

「帰りが遅くなったおばさんが悪いの。おばあちゃんはきつと大丈夫よ。さあ、おばあちゃんを探さないかね」

瀬川のおばさんの言葉でまつりはようやく少しだけ落ち着きを取り戻し、涙を手で拭った。

「私、おばあちゃんが見つかるまで捜します！」

「ありがとう。でも、お母さんが心配しているでしょう？ 一旦、家に帰ったほうがいいわ。それに、コートを着ましようね。まつりちゃんが倒れたら大変」

まつりは頷いた。

瀬川のおばさんは警察に連絡して捜索を依頼した。まつりは急いで家に帰り、母に事情を話した。

「そういうわけだから、行ってくる」

「後は警察に任せたほうがいいんじゃないの？ こんなに冷え切つて。あなたは家にいなさい。お母さんが行くから」

「私が行く！ じっとしてられないの！」

まつりは母の暖かい手を振りはらった。

「そう……気をつけてね」

心配そうにまつりの母は一言そう言った。

「まつり、待って！ クラスメイトの萩原君から電話よ」

まつりが玄関を出ようとした所へ、母が呼び止めた。

「萩原君？ 後で掛けるからって言うておいて！」

まつりはそのまま出て行った。

もし、おばあちゃんが見つからなかったら……。

まつりはおばあちゃんのことと頭が一杯だった。

おばあちゃん、一体どこへ行ってしまったの？

まつりはさつき見て回った道をもう一度歩き始めた。

「矢萩！」

振り返ると、萩原紀が息を切らせて走ってきた。

「萩原君？」

「間に合ってよかった。俺んち、ここから近いんだ。おまえ、知らなかっただろう？ カイロ、ポケットに入れておけ」

「有難う……」

まつりは事情が飲み込めないまま、萩原紀から使い捨てカイロを受け取った。

「さっき、電話でおばさんから聞いた。俺も探すのを手伝う」

「どうして、萩原君が？」

戸惑うまつりをよそに、萩原紀は持つて来た懐中電灯を照らしながら一緒に歩き始めた。

「そのばあちゃん、よくうろつる出て行くのか？」

「自分の家に居るのに家に帰らなきゃって、窓の外を見ていたの」

「まだ出て行ってからそんなに時間は経っていないんだろう？ この近くにいるはずだ。どこかに行きたいとか、何か言っていないかったか？」

「……そういえば、おばあちゃんは川の側の家って言っていた」

「じゃあ、川沿いを探そう」

この近くには忠別川が流れていた。冬の堤防は除雪もされず、雪に覆われたままだ。

吹き付ける雪。人を近寄らせない冷たい風景。二人は土手から住宅街を見下ろしながら歩いた。だが、それらしき人影はない。

まつりは急に不安になった。

「おばあちゃん、もし死んじゃったら……」

「馬鹿なことを考えるな！ きつと大丈夫だ。行くぞ」

萩原紀の怒鳴り声で、動転していたまつりは少し落ち着きを取り

戻した。

そうだ、今はおばあちゃんを見つけることだけを考えよう。堤防沿いを、まつりの先に立って萩原紀がどんどん歩いていく。まつりが歩きやすいように足で雪をかき分けながら歩いてくれた。た。

益々降り積もる雪。足跡さえかき消してしまう勢いだっただ。人を飲み込んでしまうように不気味に青白く染まる雪の中、萩原紀の背中を追いながら、まつりは黙々と歩いた。

「大丈夫か？」

「うん……」

萩原紀のぶつきらぼうな声掛けが優しく感じる。

萩原君は何故こんなことに付き合ってくれるのか。まつりには分からなかった。ただ、彼の背中がとても頼りがいのあるものに見えた。木が生い茂る神楽岡公園を通り過ぎ、神楽橋が見えてきた。遠くに街の明かりも見える。

「萩原君、もうだめだ。おばあちゃんは見つからない。おばあちゃんの足でこんなところまで来れないよ」

まつりは立ち止まって、萩原紀のコートの裾を引っ張った。

「めそめそするな！ 諦めるな！ そうだ、警察の方が先に見ついているかもしれない」

萩原紀が携帯電話でまつりの家に電話をかけた。

もう時間が経ち過ぎている。もし見つかっていなかったら、おばあちゃんは……。

まつりは最悪のことを考えてしまっていた。

「……見つかっていないって」

萩原紀は携帯電話を切り、視線をそらしたまま言いつらそうに呟いた。

「萩原君、もういいよ」

涙が滲み、遠くに見える街の明かりがぼやけて見えた。

「もういいって、どういうことだ？ おまえは帰ってる。俺が探す

から。きつと見つけてやる。お前が諦めても俺は諦めないからな」
萩原紀はまつりの言葉を待たずに、先へ進んで行った。

このまま帰るなんてできない。

まつりもその後をついていった。

「そう簡単に死んでたまるか！」

前を向いたまま、萩原紀は大声でそう叫んだ。

自分が諦めてどうする。萩原君がこんなに一生涯懸命探してくれているのに。まつりは恥ずかしくなった。

「あつ！ 誰かうずくまっっている！」

土手の先に黒い人影が見えた。二人は全速力で走ったが、膝まで積もっている雪が行く手を阻み、足が重くてなかなかたどり着けずにもどかしかった。

「おばあちゃん！」

まつりが息を切らせながら叫ぶと、じつとうずくまっていた人影が動いた。

おばあちゃんだ！

全身に電気が駆け抜けるような感覚が走った。よかった。おばあちゃんが見つかった！

「ああ、咲子。迎えに来てくれたんだね」

おばあちゃんはゼーゼーしながら立ち上がり、にっこり微笑んでまつりの頬を撫ぜた。

手袋もはめていなかったおばあちゃんの手は冷え切り、氷のように冷たい。

「私はまつりだよ？ おばあちゃん、家に帰ろう」

「帰ろうと思ったんだけど家が何処にもなくなってるね。おかしいね。敬三もお腹を空かせているだろうし。咲子、母さんが悪かったね。

ずっと敬三の子守をさせて。ごめんね、ごめんね」

拝むように両手を顔の前でこすり合わせて、おばあちゃんはしきりにまつりに謝った。寒さで頬を赤くさせ、唇を震わせている。

「敬三って誰？ おばあちゃん、しっかりして！」

おばあちゃんはその場に座り込んでしまった。

「おばあちゃん、おばあちゃん！ ごめんなさい。私が、私が……」
まつりは気が動転してただ名前を呼ぶことしかできなかった。

このままじゃ、おばあちゃんが死んでしまう！

「矢萩！ しつかりしろ！ カイ口で婆ちゃんの体を温めるんだ！
今、救急車を呼ぶからな！」

萩原紀が携帯電話で救急車を呼んだ。

私のせいだ。私が、あの時気がついていれば。要ちゃんに近づこうとおばあちゃんを利用して、おばあちゃんのことを考えていなかった私が悪いんだ。

そのあと、何がどうなったかまつりは何も覚えていなかった。萩原紀が全て動いてくれたようだった。
気がついた時には、まつりは病院にいた。

「まつりちゃん！」

車で駆けつけた瀬川のおばさんが駆け寄ってきた。

「ごめんなさい！ 私……」

「おばあちゃんを見つけてくれて有難う。帰りが遅くなったおばさんが悪いの。まつりちゃんのせいじゃないわ」

瀬川のおばさんは涙ぐんでいた。

「でも、おばあちゃんに何かあったら」

「全部おばさんのせい。おばさんね、最近苛々して……お通夜のあとにおばあちゃんのいる家に帰りたくなくて、喫茶店へ行つてただぼおつと珈琲を飲んでたの。おばあちゃんから逃げたくて。

馬鹿ね。そんなことをしても何にもならないのに……だから、まつりちゃんは悪くないの」

瀬川のおばさんはハンカチで目頭を押さえた。

「おばさん……」

苦しそうな瀬川のおばさん。おばさんはきつと誰にも頼れず、一人で何もかも抱え込んでいたのだろう。瀬川のおばさんの涙に誘われ、まつりも一緒に泣いてしまった。

それから救急室での処置が終わるまで、まつりは救急室のドアをじっと見つめてただひたすら祈っていた。

どうか元気になりますように！

一時間後、危険な状態は脱しましたと医師からの説明があり、まつりは足の力が抜けた。

おばあちゃんは軽い肺炎を起こしたうえ、心不全が悪化しており予断は許さない状況だが、今のところ大丈夫だろうとのことだった。

「おい矢萩、大丈夫か」

少し離れた待合の椅子に座っていた萩原紀が立ち上がり、ふらふらと歩いてきたまつりを見て、心配そうに声をかけた。

瀬川のおばさんがおばちゃんにそのまま付き添い、まつりは帰るように言われたのだった。

萩原紀が救急車に同乗して一緒に付き添ってくれていたことを、まつりはすっかり忘れていた。

「萩原君」

萩原紀の顔を見た途端、張詰めていた糸が切れたように再び涙が溢れてきて、まつりは両手で顔を覆った。

「おい、どうなんだよ？　ばあちゃんは大丈夫だったのか？」

声を出すと尚更涙が止まらなくなりそうな気がして、こくりと頷いた。

「そうか、良かったな」

萩原紀は顔一杯の笑顔でそう言った。

「ありがとう」

まつりはかすれた声でそう言うのが精一杯だった。

「矢萩が頑張ったから見つかったんだよ。……あのさ、こんな時に何なんだけど、俺……」

「まつりちゃん！」

萩原紀が頭をかきながら話を切り出したとき、まつりを迎えに来た瀬川要の姿が見えた。

「まつりちゃん、俺のせいだろうか？　俺が」

「違うの。要ちゃんのせいじゃない」

「俺が悪かったんだ。……家まで送っていく」

瀬川要は萩原紀のほうをちらと見た。

「萩原君はクラスメイト。一緒におばあちゃんを探してくれたの」

「そうか、ありがとう。君の家は？ 送るよ」

「近所みたいなの」

黙っている萩原紀の代わりに、まつりが答えた。

「要ちゃん、忘年会は？」

「母さんから連絡入ってすぐ抜けてきた。あれから酒は飲んでいないよ。今夜はいくら飲んでも酔えない気がしたから。飲んでいなくて丁度良かった」

瀬川要の意味ありげな言葉。それは、付き合っていた彼女のことを想って？ まつりはその言葉が気にかかった。

三人は駐車場へと歩いた。

ぎゅっ、ぎゅっ。

酷く降っていた雪は止み、新雪を踏みしめる足音が響いた。

萩原紀は硬く口を閉ざして一言も話さない。先を歩く瀬川要の背中をじっと睨みつけて、怒っているように見えた。

「さあ、どうぞ」

まつりは萩原紀と後部座席に座った。

「まつりちゃん、今日は横に乗らないの？ ああそうか、彼氏が一緒か」

「萩原君は彼氏じゃありません！」

まつりは即座に強く否定した。

「そうか」

瀬川要はそれ以上訊いてこなかった。

むきになつて否定してしまった。要ちゃんに変に思われた？

こんなにどきどきしている。

自分の言動を瀬川要がどう思ったか、まつりは気にかかった。

「矢萩、俺がおまえの彼氏じゃだめか？」

「えっ、またからかわないですよ。クラスで冷やかされているのに」

黙っていた萩原紀の意外な言葉を、まつりは素直に取れなかった。

「俺は冷やかされても構わない」

「こんな時に馬鹿なことを言わないで」

やだ、要ちゃんがいるのに。

「俺、本気なだけけれど。今日、会ってきちんと言おうと思っていったんだ。二十四日の夜に会ってほしいって。この前も言ったけれど、冗談だと思われていそうだったから」

「そんなこと言われても……」

「あ、俺ここで降ります。じゃ、明日はいい返事待っているから」
大きな通りで車が止まり、萩原紀は振り返りもせず走り去った。車は再びゆっくりと走り出した。瀬川要は無言のまま運転している。

「ムードも何もないんだもの。嫌になっちゃう。ね、要ちゃん」

重たい嫌な空気。黙っているのが苦痛で、まつりは苦笑いしながらそう言った。

「ムードがあったら、オーケーしていたのか？」

「そんなこと、ないけれど」

「俺はまつりちゃんに振られたんだから、口出しする権利はないけれど」

瀬川要は冷淡な口調で続けた。

私「私が要ちゃんを振った？　そういうことになってしまっの？
確かに要ちゃんから逃げ出したけれど。」

まつりは瀬川要の言葉に引っかけた。

雪化粧したプラタナス並木を、仄かに明るい街燈が照らし出している。まるで車を吸い込むような木々でできたトンネル。今夜は薄気味悪くさえ感じる。

萩原紀とはただのクラスメイト。好きなのは瀬川要。そう言いたかった。だが、瀬川要の後姿は冷たくて、無言の背中は会話を拒絶しているようだった。

言えない。また要ちゃんを怒らせてしまいそうだ。おばあちゃん、これはおばあちゃんを利用しようとした私への罰ですか。私はどうしたらいいの？　おばあちゃん、教えて。

木々さえも自分のことしか考えない自分をあざ笑っているかのよ

プラタナス並木の道から

うに見えた。
家に着くまで二人は無言だった。

10・励まし

けだるい朝。

まつりは翌日、祝日だということもあり、昼頃までベッドから出なかった。体は疲れていたのだが一晩中眠れなかったのだ。

おばあちゃんは本当にもう大丈夫なのか。瀬川要はもうこちらを向いてくれないのか。萩原紀とはどうしたらいいのか。夜通し悶々としていた。

自己嫌悪。自分が嫌になった。もう何も考えたくない。夜が明けても、布団の中でまつりはただぼんやりとして現実逃避をしていた。「もういい加減に起きなさい！」

母が部屋に乗り込んできてカーテンを開けた。

眩しい日差しが差し込む。まつりは布団をかぶった。

「どうせ休みなんだから放っておいてよ」

「瀬川さんの奥さんから、おばあちゃんはもう心配ないから有難うって電話がきていたわよ」

「えっ。よかったあ」

まつりは布団から顔を覗かせた。

「それより、萩原君から午後二時に来るって電話が来ていたわよ」

「どうして早く言ってくれないの！ もう一時半だ。シャワーも入れない！」

まつりは布団を放り、急いで着替えた。

「何度も言ったけれど、生返事ばかりしていたでしょ。困った子それに、まつりの好きな人って瀬川のお兄ちゃんじゃなかったの？」

「それとも、もう告白して振られたから乗り換えたの？」

母は心配そうにこちらを見ている。

「お母さんには関係ないでしょ！」

まただ。母は何でもお見通しだ。瀬川要のことも見透かされていた。まつりは母に丸裸にされたような気がしてうんざりした。

キッチンに行き、トーストをほおばりながら、まつりは母親に抗議した。

「どうしてお母さんはそうやってなんでも詮索するの？」

「だって心配だから……それで、まつりはどうするの？ 萩原君にするの？ 明日はイブでしょう？」

「娘の恋愛にまで口を挟まないで！」

「でも、一言だけ言わせて。好きという気持は妥協できないのよ。あっちがだめだったからこそこっちの人というわけにはいかないの。本当に好きな人でないとうまくいかないものよ。それに、相手を傷つけることになるから」

「そんなこと、わかつてる」

口ではそう返事をしたが、凶星だった。

瀬川要は諦めて萩原紀でもいいかもしれないなどと、自分が傷つくのが怖くてふと考えてしまっていた。気にしていないつもりだったが、友達にも彼氏がいて、ちょっと寂しく思っていたのも事実だ。「よく、考えてね」

鋭い母の一言が胸を突く。

母は今までにどんな恋をしたのだろう。母の意味ありげな言葉は、まるで自分の経験を語っているような、どこことなく含みを持たせるような言い回しに聞こえる。

再び好奇心が頭をもたげてきた。

「ねえ、お母さん。お父さんとはどうやって知り合ったの？」

「突然、何よ。あなたの参考にはならないわよ」

キッチンを磨く手を止めないまま、母が受け流した。

「だって、前にも聞いたけれど教えてくれないんだもの。大恋愛なの？ もしかして人に言えないような不倫だったりして！」

「親をからかわないの！」

強い口調。母の手が一瞬止まった。その後姿に緊張が走ったように見えた。

まさか、ね。

まつりは母の態度に何か引つかかるものがあつたのだが、「もう二時になる」との母の一言で、今はそれどころではないということ思い出し、慌ててトーストの最後のひとかけらを口に放り込み、急いで洗面台の前へ立った。

寝癖が無残なヘアスタイルを作っている。今からドライヤーで整えるには時間が足りない。まつりは仕方なく三つ編みにしてみた。

「あら、三つ編みにしたの？ そうしているとお母さんの学生時代そっくりね」

母は腕組をし、目を細めて懐かしそうにまつりを見た。さっきの硬直した態度が嘘のように、いつもの穏やかな母だった。

母の若い頃の写真は無い。家が火事になったと聞いている。今度父が帰ってきたら母のことを色々訊いてみようと思つた。

玄関のチャイムが鳴った。

「ほら、来たわよ」

母に言われるまでもなく、まつりは玄関に出た。

「出掛けてくる！」

「部屋に上がってもらうんじゃないの？」

母の声を背に、まつりは外へ出た。

「行こう、萩原君」

「何処へ？」

「とりあえず歩く」

まつりは萩原紀の顔をまともに見ないまま、先に立ってどんどん歩いた。家では母に何かと詮索されそうで嫌だったのだ。

青空に眩しい太陽。雪に反射して下を向いても眩しさは変わらない。昨夜降った新雪がきらきらと眩い光を放っている。

萩原紀は無言でまつりの後をついてくる。

気がつくと、プラタナス並木が視界に広がっていた。まつりの足は無意識にこの道へと向かっていたのだ。

「矢萩になかなか言い出せなくて。昨日はあんな時に言ってごめん」萩原紀はまつりの横に並び、ちらりとこちらを向いて言った。ま

つりはただ、こくりと頷いた。

「怒っているのか？」

まつりは頭を大きく横に振った。

そんなことないけれど、萩原君の気持ちは嬉しいけれど、でも……。

「あいつのこと、まだ好きなのか？」

「……うん」

まつりはようやくそう答えた。

「でも、あいつにはもう彼女がいるんだろう？」

「……振られたって言った」

「きいたのか？」

「昨日……瀬川のおばあちゃんと留守番していた時に、要ちゃんが帰ってきて」

まつりはぽつりぽつりと話し始めた。

「……俺のこと好きなんだろう。イブと一緒に過ごそうって……でも酔っていたし、からかわれたんだと思う」

「あいつにちゃんと訊いたのかよ！」

萩原紀は足を止めて大声を出したので、まつりは目を見開いた。

「どうして萩原君が怒るの？」

「……おまえの、矢萩のことだから」

足元を見て萩原紀は呟いた。

可愛いと思った。視線をそらしたまま、苛々した口ぶりで、自分のことを心配してくれている萩原紀のことが可愛い。

まつりはつい、ふふつと笑ってしまった。

「なんだよ！ 人が心配してやっているのに！」

「ごめん。萩原君、ありがとう」

まつりは素直に謝り、笑顔を返した。

「きつと覚えていないと思うけれど」

萩原紀はそう前置きして話し始めた。

「俺、矢萩に小学生の頃、会っているんだ」

「え？」

「おまえ、転んで足に怪我をしたことがあるだろう？ あの時、俺もその病院にいたんだ」

萩原紀は照れくさそうに鼻の頭を手でこすった。

「あの病院、俺んちなんだ」

まつりは記憶を思い起こした。

そういえば、確か萩原整形・外科医院という名前だった。

「土曜日の時間外に来ただろう？ あの時、俺は丁度、親父と出掛ける所だった。それなのに急患が来たからふてくされていたんだ。

それで、どんな奴が折角の土曜日を台無しにしたのかと診療を覗いた。そうしたら矢萩がいて。おまえさ、大泣きしていたのに傷を縫合する時はまったく泣かなかった。親父が縫合しやすいように動かないでじっとしていただろう？ 凄い奴だなって」

うる覚えだった。だが、そう言われてみれば同い年くらいの男の子が、診察室を恨めしそうに覗いていたような気がする。

「うまく言えないけれど、お前って根性あるんだからさ、強気でいけよな」

一生懸命、励ましてくれる萩原紀。

そんなことを覚えていてくれたなんて。ずっとわたしのことを見ていてくれたのだろうか。

まつりは気恥ずかしくなった。

「きちんと告白してさっさと振られて来い。そのあとは……俺が矢萩を貰う」

まつりの瞳を見つめてそう宣言した萩原紀はとても凜々しかった。

眩しい陽の光の下、一点の曇りもない萩原紀の真っ直ぐな瞳は、まつりには眩し過ぎて思わず目を伏せた。

「うじうじしているのはお前らしくないぞ」

「うん……」

まつりは臆病になっていた。瀬川要に告白した後に傷ついた自分を想像すると、怖気づいてしまうのだ。萩原紀に背中を押され、まつ

りは少し勇気を取り戻した。

そこからは冗談を言い合い、憎まれ口を叩くいつもの二人に戻れた。道沿いにある教会を過ぎ、石倉造りのお菓子屋さんで珈琲を飲み、二人はたわいのない会話を交わし、そしてさよならをした。

「俺、矢萩からの電話を待っているから。どっちにしても絶対電話しろよ！」

帰り際、萩原紀は念を押すように言った。

笑顔で手を振って別れたのだが、まつりはもう心に決めていた。

瀬川要に振られても萩原紀とは付き合えない。やっぱり、そんな身勝手なことではできない。そう思ったのだ。

11・母の嘘

まつりはその足で瀬川要を尋ねた。弱気にならないうちに会おう。そう思ったのだ。三つ編みのヘアスタイルが幼く見えて気に食わなかったが、そんなことは言っていられない。今を逃したら、また怖気づいてしまいそうだった。

まつりは勢い込んで瀬川家を訪ねたのだが、呼び鈴を押しても応答がなく、肝心の瀬川要は不在だった。瀬川家には誰もいなかったのだ。

仕方なく、まつりはいったん家へ帰った。

「どうだった？」

好奇心で目を輝かせた母がまつりを待ち構えていた。この人は本当にこの手の話しが好きなのだろう。娘の恋愛に口をはさむ母に、苛立ちというよりは呆れ果ててため息が出た。

「ふっ」

「まつり……」

「お母さんには関係ないでしょ」

「冷たいのね」

「お母さんの噂話の種にされたくないもの」

「そんなことしないわよ。あなたのことが心配だから」

「大丈夫、いいの。放っておいて」

まつりの返事に、母は不満そうに腕を組んでこちらを見た。

「少しは娘のことを信用して自由にさせてよね」

まつりは母に向かって嫌味っぽくにつこり笑いながら階段を上がった。

「心配しているのにそんな言い方しなくてもいいじゃない」

母の大きな声の独り言が、階段を上がる途中で聞こえてきた。

「あ、まつりに言い忘れる所だった」

「何よ」

「瀬川さんのご家族、皆で病院へ行つたみたいよ。瀬川のおばあちゃんの状態が急に悪化したのかも」

「えっ！ 何で早く言ってくれないのよ！ いつとも肝心なことを後で言うんだから！ それ、何時頃の話？」

暢気な母の話し方が焦りを助長させ、まつりはきつい口調になった。

「そうねえ、まつりが出掛けた直ぐくらいかしら？」

その返事を聞き終わらないうちに、まつりは階段を駆け下りてコートに袖を通すなり、行つてきますと言いながら玄関へ走った。

「どこへ行くの？」

どこへ行くのかわかりきっているのに、わざとらしく訊いてきた母に、まつりは「病院！」と答えて玄関を飛び出した。

自分が行つたからといってどうにもならないことは、まつり自身よく分かっていた。でも、行かずにはいられなかったのだ。瀬川のおばあちゃんは自分の不注意で体を悪くしたのだから。そんな罪悪感がまつりにあった。

バスに揺られながら、まつりは最悪の事態を想像してしまつていった。いくら良い方に考えようとしてもどうしてもその考えが頭から離れないのだ。

もし、おばあちゃんが死んでしまつたら……。

雪でがたがたの道を、路線バスはのんびりと進んでいる。病院まではバスの乗り継ぎになる。着くまでに一時間はかかつてしまうだろう。

ああ、神様！

まつりは俯き、両手を重ねてきつく握り締めた。普段は神頼みなどしたことのないまつりだったが、すぐれるものには何にでもすがりたい気分だった。

あれこれと考えすぎて疲れきつた頃、まつりは病院にたどり着いた。

おばあちゃんは個室に移されていた。

ここまで来たものの、扉の閉まった病室の前でまつりは躊躇した。ただのご近所という立場のまつりが、容態が悪化して立て込んでいる所へ顔を出しても、邪魔になるだけではないか。やっぱり会わないで帰るべきだろうか。

そう思うと扉を開ける勇気がなく、まつりは暫く扉の前でうろろろしていた。

「あれ？ まつりちゃん」

背後から声をかけられ、まつりはびっくりとした。振り向くと瀬川要がきよとんとした顔でこちらを見ていた。

「あの、ちょっと近くに来たから……おばあちゃんどうかなって……」

ついでに寄ったにしてはもう外は暗くて不自然だったと、言った後に気がついた。

「そう。ありがとう。でも、ばあちゃんは寝ているから。折角来てくれたけれど、また今度会ってあげてくれるかな」

「個室に移ったのはおばあちゃんの具合……だいぶ悪いの？」

「いいや、微熱があるけれど変わりないよ。夜中に起きてごそごそするから同室の患者が寝られなくて移されたらしい」

まつりは恐る恐る訊いたのだが、瀬川要はあっさりと否定した。

「でも、家族揃って病院に行ったって……」

「ああ、母さんに頼まれて街まで車で送ったんだ。で、俺が代わりに婆ちゃんの所に来たというわけ」

まつりを安心させるために嘘を言っているのではないかと一瞬思ったが、瀬川要の態度からは深刻そうなものは感じられなかった。

またお母さんの人騒がせな早とちり。いや、もしかして要ちゃんに会わせようとわざと嘘を言ったのかもしれない。母ならやりかねない。

まつりは肩の力が抜けた。

「まつりちゃん、もう暗いから家まで車で送ってあげるよ。婆ちゃ

んは寝ちゃったし、もう帰ろうかと思っただころだから」

瀬川要は小学生に語りかけるように、優等生の笑顔で言った。
まつりはこくりと頷いた。

あの夜のぎらぎらした瀬川要。そして、昨夜の車中での冷淡な瀬川要。あれは思い違いだったのかと思えるほど、今の瀬川要は面倒見の良い優しいお兄さんという態度だった。

要ちゃんは私を子ども扱いするの？ あの夜はお酒に酔ったせい？

あの時、まつりはいつもと違う態度の瀬川要から逃げたのだが、こうして何事もなかったかのように子ども扱いをされてみると、突き放されたような寂しさを感じた。

要ちゃんは、もう、妹分としか見てくれないの？ まつりは何度かその言葉が喉まで出かかったが、黙って瀬川要の後ろをついていった。

昼間あんなに日差しが暖かったのに、息も凍りそうなほど外は冷え込んでいた。屋外の駐車場は路面が氷っていて、転ばないように足元に注意を払いながら歩いた。気がなく、静まり返った駐車場は、二人の靴音さえも暗闇に吸い込んでしまうように思えた。

「はい、お姫様どうぞ」

以前のように、瀬川要はおどけながら車の助手席のドアを開けた。こわばった表情のまま、まつりは席に着いた。

「なんだ、腹でも痛いかな？」

車が動き出した後も、無言でいるまつりに、瀬川要は軽い調子で茶化した。

「馬鹿」

「だって、渋い顔をしているから」

要ちゃんは、どうして普段と変わらずに話ができるの？ 昨日だって気まずいまま分かれたのに。私にはそんな器用なことできない。要ちゃんは何を考えているの？

運転中、瀬川要の横顔は穏やかで、まるで何事もなかったようだ。

こんな顔を見ていると、このままいつものように憎まれ口を叩いて二人で笑っていたい衝動に駆られてしまう。でも、それはもうできない。そんなことをしていたら励ましてくれた萩原君になんて言えればいいのか。振られるかもしれないけれど、しっかり告白しなくては。そして、萩原君にはやっぱり要ちゃんが好きだからと言わなければならぬ。

まつりの気持はそう決まっていた。

でも、もしかしたら少しくらいは望みがあるだろうか。

「要ちゃん……」

「なに？ そんな怖い顔をするな。昨日は俺が悪かった」

「え？」

「昨日、馬鹿なこと言っただろう？ 俺、あいつに可愛い妹をとられたようで癪に障ったんだ。嫌な気分にしただろうなって、あの後からずっと気になって……」

正面を向いたまま、瀬川要は照れたように笑いながら言った。

可愛い妹。

まつりの頭の中はその言葉で一杯になった。他の言葉は耳に入らず、ただ、その言葉が何度も繰り返し響くのだ。

「クリスマスにあの男の子と会うんだろう？ かつこいい彼氏ができて良かったな。俺も可愛い彼女を見つけるとするか」

無言でいるまつりに、瀬川要は賑やかに話し続けた。

もう振られたも同然。

瀬川要の話に呆然とし、まつりはどんどん告白する機会を逸していた。

要ちゃんにとって、自分は妹分ではない。

もしかしてと少し期待していた分、シヨックは大きかった。まつりは瀬川要の顔をまともに見られなかった。その優しい笑みは妹分に向けた笑顔なのだ。

「彼氏ができたからって、俺のこと無視するなよ？ 今まで通り、学校まで送ってあげるからさ」

瀬川要はそんなまつりの気持を逆なでするように、優しい笑顔で話続けた。

「微笑みかけないで。冷たく振られた方がまだましだ。もう勘違いさせないで。」

まつりは最後の勇気を振り絞った。

「要ちゃん、ちょっと遠回りしてくれる？ 神楽岡公園の横を通ってほしいの。」

瀬川要は「オーケー」と言って、少し道を戻り、神楽橋を通過してプラタナス並木の道に入った。

「ここで車を停めて。」

「こんなところで？」

「少し、一緒に歩きたい。」

瀬川要は頷いて車を路肩に止めた。午後六時。辺りはすっかり暗くなっていた。プラタナス並木のトンネルを次々と車が通り抜けていき、サーチライトが眩しかった。

二人は黙って雪道を歩き始めた。歩道は道が悪く、片方が雪深いところを歩かなくては、並んで歩けない。瀬川要のスラックスの裾は雪だらけになっていた。

「まつりちゃん、手袋はめてないのか。霜焼けになるぞ。」

瀬川要は立ち止まり、まつりの冷えた片手をとって自分のはめていた黒い皮手袋をまつりの片手にはめた。

「こっちの手はこうすると暖かい。」

瀬川要はそう言ってもう片方のまつりの手を握り、自分のコートのポケットに突っ込んだ。

「こういうの、一度やってみたかったんだ。」

瀬川要は照れたように笑い、

「好きな彼氏とじゃなくてごめん」と、続けた。

瀬川要の、大きくて暖かい手がまつりの手を握っていた。

まつりの手から早鐘のような鼓動が瀬川要に伝わってしまうのはと思うほど、まつりはどきどきしていた。

夢のようだった。瀬川要とこんな風に歩けるとは、まつりは思っていないかった。

でも、これがきつと最初で最後。振られてしまっただけで今は辛くても、いつか楽しい思い出として笑って話せる日が来るのだろうか。まつりはそんなことを思いながら、俯いて歩いていた。

「まつりちゃん、見てみるよ。教会が綺麗だ」

瀬川要が足を止めた。道路を挟んだ向かい側に、クリスマス用の大きなリースが取り付けられた教会が見えた。美しくライトアップされ、暖かな明かりが雪を照らしている。

「まつりちゃん、もしかして、これが見たかったのか」

確かに、この道を瀬川要と一緒に歩いて教会を見上げ、楽しい想像をするのがまつりの夢だった。今、まさに状況はその通りになったのだが、とても楽しめる心境にはなれなかった。

要ちゃんの心は私にはない。

「クリスマスチャンじゃないけれど、こんなところで結婚式を挙げたらいいだろうなあ」

まつりが黙っていると、瀬川要はそんなことを呟いた。

「男がこんなことを言ったら変か」

苦笑した瀬川要に、まつりは何も言い返せなかった。

要ちゃん、残酷すぎるよ。まつりの前でそんな話をしないで。

まつりは無意識に、繋いでいた手に力が入っていた。

「まつりちゃん、寒いのか？」

「……違うの」

まつりは頭を大きく横に振った。

「さっきから黙っているけれど、どうかした？ 俺、何か気に障ることをしたかな。やっぱり手を繋ぎたくなかった？」

「違う、違うの」

まつりは再び頭を横に振った。口を開くと涙が流れそうだった。声を上げて泣き出してしまっただけだった。

要ちゃんが好き。どうしようもなく好き。要ちゃんの声が優

しければ優しいほど、たまらなく辛い。要ちゃんは私のことを妹分としか見てくれないのだから。

「……要ちゃん、もう、私に優しくしないで！」

要の手を振り払い、そう言うのが精一杯だった。まつりは泣いていた。涙がぼろぼろと流れた。

「まつりちゃん？」

「歩いて帰る！」

要に背を向け、振り向かずにまつりはそのまま走った。プラタナス並木が続く道を、息が切れるまで走り続けた。

もう要ちゃんと顔を合わせられない。最悪なクリスマス・イブ。

暖かく幻想的な電飾の明かりも、プラタナス並木のトンネルも、まつりにはただ辛い景色に変わってしまったのだ。

12・父と母

冷たい涙を流し、寒さで頬を真っ赤にして帰宅したまつりは、穏やかな母の笑顔に迎えられた途端、何故かまた涙が溢れた。

「泣きたい時はね、思いつきり泣くのが一番。自分の家で格好つける必要なんてないんだから」

何もかも分かっているかのように、まつりの母は言った。

「だいつ嫌い！ お母さんなんか！ なんでいつも何でも知っているようなことを言うの？ 私にかまわないでっ！」

半分八つ当たりだった。まつりは苛々した気持をそのまま母にぶつけていた。

「うるさいといわれようがお母さんはあなたのお母さんなのよ。まつりのことを心配するのがお母さんの仕事なの。大事な娘だもの。」

紅茶、飲みなさい。温まるから」

八つ当たりなどまつりの母は意にも介さず、穏やかな態度は崩れなかった。

まつりは母に肩を押され、コートを脱がないままソファに座った。

暫くして、紅茶の香りが漂ってきた。その香りは母の香りと重なるほど母は紅茶をよく口にしている。

まだ涙が枯れないまつりは、マグカップに並々と注がれたミルクテイを母から受け取った。

マグカップから手に伝わる温かさが心地よい。口に含んだ紅茶は心までも温めてくれる気がした。紅茶の香りはまつりの気持を少しずつ落ち着かせた。

「ケーキ、食べる？」

につこり笑った母は白いケーキをのせた皿をまつりに差し出した。

「いらない……」

「食べなさい。ケーキを食べたら、元気が出るから、ね？」

まつりは渋々皿を受け取り、一口、口に運んだ。

母の手作りケーキ。まつりはいつの頃からかクリスマスを友人と過ごすようになっていた。それでも母は毎年ケーキを作っている。まつりの帰りが遅くなっても必ずケーキを差し出すのだ。誰のために作っているのだろうか。父のため？ 父はクリスマスに家にいたことがない。この数年間、母は毎年一人で過ごしてきたのだ。ずっと一人の母。父が最後に帰ってきたのはいつだっただろうか。

そんなことを考えながら、母を見たまつりは、その笑顔の奥に寂しい影が隠されているような気がした。もしかしたら、父と母はうまくいっていないのだろうか。それとも、やっぱり母と父は……。まつりは急に不安になった。瀬川要のことで頭が一杯だったはずのまつりは、母のことが気になり始めていた。

「お母さんはいつも一人で寂しくないの？」

「寂しくないって言ったら嘘かもしれない」

母のことだから、「寂しいわけがないでしょ。お父さんがいなくてせいせいするわ」などと、笑って返すと思ったのだが、予想外に真顔でそう答えたので、まつりは戸惑った。

母はまつりの真向かいに座り、まだじっとこちらを見ている。

「あのね、まつり」

嫌な予感がした。いつもと違う母の緊張した表情。何か嫌なことを聞かされる。まつりは身構えた。

「あなたに話していないことがあるの」

まつりがどんな反応を示すのか一瞬も見逃さないようにと思っっているのか、母は瞬きもせず、まつりをみつめていた。

「お父さんはよそのうちのお父さんなの」
言葉が出なかった。

今なんて言った？ よそのうちって？ お母さん、何を言っているの？

まつりは混乱した頭の中、そう訊きたくても声が出なかった。

「まつりにはお父さんがいないの」

「嘘……」

そう呟くのがやっとだった。

「お父さんには別のところに本当の家族がいるの」

本当の家族って何？　じゃあ、まつりやお母さんは嘘の家族だというの？

母の言葉を受け入れられない気持とは裏腹に、まつりは以前からそのことに薄々感じていた。いくら出張が多い仕事といっても、父は家に二日と続けて泊まったことがないのは、いくらなんでもおかしい。父の職業が何であるかを訊いても、『冗談交じりに『何でも屋』としか答えてくれず、濁されたまま、まつりは高校生になっってしまった。それでもまつりは現実を認めたくなくて、心の中でその事実をずっと否定してきたのだ。

「まつり、普通の家庭とは違うと感じていたでしょう？」
すまなさそうにまつりの顔色を伺っている母。

母を責めたくはない。母がどんな恋愛をしていたとしても、母の生き方を否定したくない。ちょっとおしゃべりでおせっかいだけれど、大切な母。母を悲しませたくない。でも、どんな顔をしたらいい？

まつりは笑顔を作ってみようとしたが、顔が引きつって他人の顔のように言うことをきかない。

「そんなこと分かってたわよ」

「まつり……」

強がってみたが無駄だった。涙がじわじわと視界を遮っていく。世界がぼやけて何も見えなくなつた。

まつりは自分でも何の涙なのかわからなかった。悲しいのか、それとも怒りなのか。説明のつかない涙がただただ流れた。手で拭いても次から次へと涙が溢れてくるのだ。

その間も、母の視線はずっとまつりを捕らえたままで、息苦しい重圧感があった。

母と顔を突き合わせていたくない。このまま一緒にいたら、母が傷つくことを言ってしまうそうだ。

「そんなこと……イブに言わなくてもいいじゃない！」

まつりは俯いて母と視線を合わせないまま、語彙を荒げて吐き捨てるように言った。

やってしまった。

母の顔が曇る。辛そうにこちらを見つめている。まつりは言ったそばから後悔した。そんなことを言うつもりはなかったのに。母を悲しませることはしたくなかったのに。母はいつでも威勢が良くて、元気で、笑顔を絶やしたことがないのに。その母が今にも泣き出しそうに目を潤ませている。まつりは感情を抑えきれなかった自分に苛立った。

いたたまれなくなり、まつりは逃げるように二階へ駆け上がった。部屋では赤いリボンをつけた包みがまつりを待ち構えていた。勉強机の上に置いてあるそれは、瀬川要に渡すはずだった皮手袋の包みだ。そして、コートのポケットには瀬川要が貸してくれた手袋の片方が入ったままになっていた。

どうして渡さないの？ このまま中途半端に終わらせてもいいの？

赤いリボンがまつりを恨めしそうに責め立てる。

振られると分かりきっているのだ。今更、告白してどうなるという。困ったように頭をかき、すまなさそうにこちらを見る瀬川要を容易に想像できてしまうのだ。

まつりはドアに寄りかかったまま、その場に座り込んだ。

「まつり、話を聞いてほしいの」

母がドア越しに声をかけてきた。

「もういい！ 今は何も聞きたくない」

「今聞いてほしいの。お父さんとお母さんは結果的にはこうなってしまうけれど、後悔はしていない」

「後悔していいのなら、何故今まで隠していたの？」

「ごめんなさい。これはお母さんの我が儘なの。ごく普通の家庭を持ってみたかった……」

「言い訳なんかしなくたっていいじゃない。珍しくもない、ただの不倫でしょ？」

まつりは唇をきつく噛んだ。母を責めるような言葉が出てきてしまう自分が恨めしかった。

「お父さんはそんなに器用な人じゃない。付き合っていた時は独身だったの。それに、まつりを身籠ったことを話す前に、お父さんは結婚しようと言ってくれた。でも、お母さんが断ったの」

「どうして？」

「お父さんは、当時、既に会社のほとんどのことを任されていた。大きな会社ではないけれど、お父さんが抜けるわけにはいかなかった」

「結婚と会社は関係ないじゃない」

「そうね。でも、そういえないこともあるの。……所長の娘がお父さんのことが好きで、その娘もその会社で働いていて……ずっとお父さんのことを見ていたのを私は知っていた。なのに、私は彼のことを好きになってしまったの。私と一緒になれば、彼は会社には居づらくなる。彼から仕事を奪いたくなかった」

母の話の中で、途中から、『お母さん』は、『私』になっていた。母は、母ではなく、愛する人を想う一人の女性に変わっていたのだ。「彼は彼女の気持ちに気づいていた。でも彼もまた他の女性のことが好きで、彼女の気持ちに気づかない振りをしているようだった」

母の小さなため息が、ドア越しに聞こえてきた。

「彼の恋は報われないもので、それでも彼は諦めきれず、その人を想い続けたまま。そんな一途な恋をする彼に、私はいつしか気持ちが傾いてしまったのだと思う」

まつりは黙って母の話に聞き入った。

「私は普通の家庭を知らない。物心がついた時には両親がいなかったから。子供の頃はかなり荒んでいて、生意気な可愛げのない子供だったと思う。こんな境遇にした者への恨みと復讐に全てを捧げていた。誰も信じず、背伸びをして生きていた。家族なんて要らない、

一人で生きていけると確信していた。だけど私は変わったの。高校生の時、ある人に出会ったから。その人もまた傷ついていて無器用な愛情しか知らなかったけれど、家族の温かみを教えてくれた大切な人」

そこまで話し、母の声は途切れてしまった。まつりは母が泣いているのではと不安になり、そっとドアを開けて母の様子を窺った。

ドアに背を向け、両足を腕で抱えて廊下に座っていた母は、意外にも穏やかな顔に笑みを浮かべ、その頃を懐かしむように目を細めていた。

母にとつてその頃は、輝かしい青春の思い出なのだろう。母の表情が生き生きとしていた。

「ある人って？」

こちらを見上げた母に、まつりは訊ねた。

「簡単に言うと、その人は復讐しようとしていた人の娘だった」

「えっ？」

「話すと複雑で、長くなるから言わないけれど」

そう言った母は本当に楽しそうに笑った。

「私はちよつぱり彼女にも恋をしていたかもしれないわね」

わけが分からなかった。復讐しようとしていた人の娘で、しかも家族の温かみを教えてくれた大切な人。おまけに、彼女に恋をしていたなんて。まつりの想像力もかなわないほど、母の青春は突飛で波乱万丈なものようだった。

「ちよつと驚かせちゃった？ 悪いこともしていたけれど大切な出会いも多かった。本当に色々なことがあったの」

肩をすくめて茶目つ気たつぷりに笑った母は、女子高生の顔をしていた。

「荒んだ心が解れてからは、子供の成長に一喜一憂するような、ごくありふれた普通の家庭に憧れるようになった。でも結局、そううまくはいかなかったけれど」

母は真っ直ぐまつりを見つめている。

「話が少し脱線したけれど、辛気臭い話しをしたかったわけじゃないの。お母さんはね、一つも後悔はしていない。まつりを産んで良かったと思っているし、まつりのことがお母さんには必要だった。血の繋がった家族がどうしてもほしかった。まつりは大切な家族なの」

母が大切に思ってくれていることは充分すぎるほどまつりにも分かっていった。どんなことでも真剣に相談に乗ってくれるし、いつも見守ってくれている。煩わしく思うことも多々あるが、母の愛情は掛け値なしに実感できた。だから父がいなくとも物足りなく感じることは滅多になかったのだ。父のことは衝撃的だったが、感づいていた分、冷静になると直ぐに納得してしまった。それ以上に母の若かりし頃の話の方が衝撃だった。平凡な人生を全うしてきたような母に、そんな過去があつたなんて。

ゆっくりと立ち上がった母は、まつりの肩に手をかけて顔を覗き込むようにして言った。

「結果がどうであれ後悔しないように」
母の、一人の女性からの重い言葉。

「いい？ 行動するの。じゃないと何も始まらないのよ」
最後に母はウインクをして階段を下りていった。

まつりはコトのポケットに入れたままになっていた瀬川要の皮手袋をぎゅっと握り締めた。

まつりの馬鹿。告白するって決めていたじゃない。
勇気を奮い立たせ、まつりは自分に言い聞かせた。

13・天使の羽

こつん。

まだカーテンをしていなかった窓に、雪玉が当たった。

まつりが窓辺に駆け寄り、外を覗くと、青白い暗闇の中でこちらに向かって大きく手を振っている人影が見えた。

萩原紀だ。

まつりは階段を駆け下りて、外へ出た。

言わなきゃ。

外は冷え込んでいた。多分、氷点下十度にはなっていただろう。歩く度に足元の雪が、さらさらと音をたてた。

「待っていられなくて」

玄関先で、寒そうに両手をポケットに突っ込んだ萩原紀がはにかんだように笑った。

「萩原君、あのね」

言いづらそうにまつりがそう切り出すと、萩原紀は途中で遮った。

「いいんだ。言わなくてもわかってる。良かったな。でも友達でいてくれるよな？」

「……うん」

萩原紀はまつりと瀬川要がうまくいったものだと思合点していたのだが、まつりは敢えて否定しなかった。その方がさっぱりすると思っただのだ。

「最後に一つだけ……いいか？」

「何？」

「あのさ……」

萩原紀はそう言って片手をまつりの方へ差し出した。

握手。

まつりは差し出されたその手を握ったのだが、不意にその手を引かれてそのまま萩原紀に抱き締められてしまった。

「萩原君？」

「俺、矢萩のこと本気で、すっごく好きなんだ。だから直ぐに諦められないかもしれない。けれど、お前のこと応援してるから。幸せになれよな」

抱き締められているその腕は震えていた。コートの上からでも萩原紀の鼓動がわかるくらい、彼の緊張がまつりに伝わってきた。

精一杯の萩原紀の潔い告白。

瀬川要の存在がなければ萩原紀のことを好きになっていたかもしれない。まつりは萩原紀の腕に抱かれてときどきしながら、そんな風に思ってしまった。

瀬川家の庭先にある瀬川要の車が、まつりの視界に入った。

要ちゃん、帰って来ている。もしかして見られているかも？

まつりは何気なく瀬川家の二階の窓を見た。人影が見えた気がして、まつりは慌てて萩原紀から離れた。

「ごめん、矢萩の彼氏に殴られるかな。でも矢萩のこと抱きしめられるのなら殴られるくらい平気だけれど」

萩原紀は視線を足元に落とし、笑って照れ隠しをした。

「じゃ、冬休み明けに学校で会おうな！」

最後に大きく手を振ってから、萩原紀は後ろを振り向かず角を曲がった。

一方的に話し、納得して帰った萩原紀に、まつりはぎゅっと目を瞑り、心の中で謝った。

ごめんなさい。萩原君に私よりもっと素敵な彼女ができますように。

残されたまつりは今何をすべきなのか充分すぎるほど分かっていった。

今度は自分の番だ。

一旦部屋に戻り、赤いリボンのついた包みをコートのポケットに忍ばせて、まつりは再び外に出た。

一歩一歩、まつりは瀬川家に近づく。足を進める度、雪がきしむ音

が響いた。

瀬川要の窓の下にたどり着くまでの時間が、まつりには妙に長く感じられた。

もう逃げない。

まつりはおもむろに素手で足元の雪をすくい上げて雪玉を握り、思いきり二階の窓へぶつけた。

うまく命中したが、瀬川要が顔を出す気配はなく、部屋の明かりは消えたままだ。

きつと部屋にいる。さっきの人影は瀬川要に違いない。まつりはそう信じた。

妹のように思われているとしても、全く関心を持ってくれないよりはいい。今は妹分だとしても、この先変わる事だってあるかもしれない。

もう一つ雪玉を握り、窓へと投げた。そしてまた一つ。窓硝子に命中するが瀬川要は現れなかった。

まつりの手は雪の冷たさで痺れて感覚がなくなった。両手に息を吹きかけて暖め、再び雪玉を握った。

要ちゃん、お願い。出てきて。

何個目かの雪玉が窓に当たった。部屋の明かりは暗いままだったが、カーテンが揺れて人影が見えたように思えた。

気のせい？

数分後、玄関ドアが開き、コートを羽織った瀬川要がまつりに近づいてきた。

「お前、何をやっているんだ？」

冷ややかな瀬川要の視線。

「あの……手袋……」

まつりは不機嫌そうな瀬川要の顔をまともに見られないまま、ポケットから赤いリボンの包みを取り出し、突きつけるように差し出した。

「手袋？」

「さっき借りたの落としちゃったから……」

受け取った包みを見ながら、訝しげに言葉を返す瀬川要に、まつりは思わずそう言ってしまった。

違う。まつりの馬鹿！

ここまでできて気持ちを伝えられない自分が情けなかった。どうしてたった一言が言えないの？ 「好きです」って、ただそれだけのことじゃない。臆病な私。傷つくのがそんなに怖いのか？ さっきまでの決心は何だったの？

「これは受け取れない」

瀬川要が包みをつき返した。

まつりは瀬川要に拒絶され、何も言葉が出なくなってしまった。

「失くしたのはもういい。それ、渡す相手が違うだろう？ さっき彼氏に渡すはずだったんじゃないのか？」

やっぱり、要ちゃんは窓から見ていた。萩原君のことを勘違いされた。

「違う」

「用はそれだけ？ 悪いけど、お前といたら酷いことを言ってしまういそうだから、じゃあな」

瀬川要は背を向けて、玄関へ戻ろうとした。

「だめっ！」

まつりは咄嗟に瀬川要のコートの裾を引っ張った。

「今言ったよな？ 俺はすごく不機嫌なんだ。お前だって彼氏に妬き持ち焼かれるような近所の兄ちゃんがいたら迷惑なんだろう？

心配するな、もうお前には話しかけないから。それでいいんだろ！」

「要ちゃん……」

嫌われた。無理もない。さっき、もう優しくしないでと言い捨てて要ちゃんを置き去りにしてきたのだから。

泣くつもりはなかった。だが、涙は寒さで感覚の麻痺した頬を伝っていく。今日は泣いてばかりだ。こんなに気が弱くて泣き虫だったかと自分で驚くほど。

「ああ！ もう泣くな。これ貰うから！ これで気が済んだか？」
まつりが握り締めていた包みを瀬川要は乱暴にもぎ取り、代わりにまつりの顔にハンカチを押さえつけるようにあてがった。

「お前ずるいよ。俺がお前の涙に弱いのを知っていて泣くんだから小さい頃からそうだったな。俺はいつもいいように振り回される」

瀬川要は苦笑した。

振り回した覚えなんかない。心をかき乱すのはいつも瀬川要の方だ。瀬川要が高校生の時も同級生の女の子と楽しそうに出掛けるのをただじつと見ているしかなかった。大学へ進学したら顔を合わせることさえままならず、姿を見かけただけで苦しかった。就職した後だって同僚と飲みに行く瀬川要を見送るばかり。早く大人になって同じ時間を過ごしたい。年の差を恨み、どんな思いでいつも瀬川要を見ていたことか。

「やめた。もう俺にはできない！ 物分りの良い近所の兄貴役なんか。そんなの真っ平だ！ まつり、来い！」

瀬川要はまつりの腕をぐいと掴み、車の助手席のドアを開いてまつりを押し込んだ。

要ちゃん？

わけが分からなかった。怒ったように顔をしかめている瀬川要に、まつりは何も言えないでいた。

瀬川要はアクセルを吹かし、乱暴に車を発進させた。冷え切った車内がまつりには瀬川要の心のように思えた。

車は闇雲に走っているようだった。街灯に照らされた青白い雪景色が車窓に飛ぶ。

「まつりに俺は勘違いさせられっぱなしだ。お前にとって俺はいつまで経っても近所の兄ちゃんではない。あっさりとお前に振られた俺がどれだけショックだったかわかるか？」

「嘘。要ちゃん私のこと酔っぱらってからかっただけでしょう？」

「要ちゃんの方こそ、いつつも女の人と出掛けて」

「馬鹿、それは友達仲間で……」

「お見合いだつてしたじゃない！」

「それは…… 大学を卒業してから、旭川に帰つてまつりと会つた時…… 可愛くなつたまつりを見て、優しい兄貴でいられる自信がなくなつて……。でも、お前は相変わらず無邪気に俺を慕ってくるし、まつりに嫌われるのが怖かつた。それで辛くて諦めようとして、お前から逃げだすのに見合いをしたんだ」

「ちらりとこちらを向いた瀬川要の瞳が、眼鏡の奥で熱を帯びたように潤んで見えた。」

「俺は臆病だ。まつりに嫌われなくなかつた。畜生！ そつと見守ることしかできないなら、嫌われた方がましだ！」

瀬川要はハンドルを握りこぶしで叩いた。

「要ちゃん」

「最後まで言わせる。教会の前でもお前に逃げられて言いそびれた」車が路肩に止められた。いつの間にか、プラタナス並木の道だつた。目の前には教会があつた。

「続きを言わせてくれ」

瀬川要は助手席に座るまつりの方へ身を乗り出した。普段、何事にも動じなさそうな瀬川要が、顔に不安の色を浮かべ、躊躇いがちに口を開いた。

「こんなオジサンに言われても迷惑かもしれないけれど、もう遅いけれど、俺は…… ずっとまつりが好きだつた」

瀬川要の真剣な眼差しがまつりを捕らえている。まつりは彼のどこに視線を合わせたらいいいのか分からなくなり、目を泳がせていた。

「要ちゃんは私のことを好きでいてくれた。本当？ 本当に？」

嫌われていない？

まつりは信じられなかつた。口を半開きにし、言葉が一つも出てこなかつた。

「今まで悩んでいたのは何だつたの？」

「嘘…… 馬鹿みたい」

目頭が熱くなる。両手を顔に当て、まつりは硬く目を瞑つた。

「馬鹿つてことはないだろう。俺、真剣に……」

「違う、私が馬鹿だつて言ったの」

まつりは涙を流しながら、笑顔で言った。

「俺はまた、小さい頃の時みたいに罵られたと思った」

「小さい頃？」

「覚えていないのか？ 俺が小六の時、お前一年で、入学式の紺色のワンピースを着たまつりがあんまり可愛くて思わず頬にキスしてしまった。そうしたら、お前、『お兄ちゃんがそんなことするのはおかしい』つて言つて、暫く口も聞いてくれなかった」

「そうだったか？」

「本当に覚えていないのか？ 俺は酷くショックで嫌われたくなくて、あれから良いお兄ちゃんにいるのにどれだけ苦労したか」

そうだ。あの時、要ちゃんにキスされて恥ずかしくつて、暫く顔を合わせられなかったつて。

「泣くなよ。迷惑なのは分かっている。でも今夜だけ」

「そんなの嫌だ」

「まつり……」

「今夜だけなんて」

瀬川要の瞳が大きく見開かれた。

「それ、どういうこと」

「ずっと一緒がいい」

「あの彼氏は？」

「彼氏なんかじゃないもの」

「俺もしかして酷い勘違いをしていたのか？」

「私も勘違いしていた」

「まつり！」

瀬川要はまつりを強く抱き締めた。

外は雪が降り始めていた。まつりには天使の羽が優しく舞い降りてくるように見えた。

「ねえ、賛美歌が聞こえる」

「行ってみよう」

二人は車を降りて手を繋ぎ、教会へ歩いた。

いつかこの教会にウエディングドレスを着て要ちゃんと二人で扉を開く日が来るといいな。

「まつり」

「なに？ 要ちゃん」

教会の扉の前で不意に瀬川要が腰を屈め、まつりにキスをした。

「早くまつりにウエディングドレスを着せたい」

「要ちゃん」

まつりは顔を赤く染めた。

瀬川要も同じことを考えていた。まつりはそれが嬉しくて、要の腕に寄りかかった。

凍える厳しい寒さの冬空から、天使の羽が、二人に優しく降り注いでいた。

長い長い二人の冬が終わった。

END

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1773a/>

プラタナス並木の道から

2008年11月7日07時06分発行